たくみ

CraftSmanship

特集 民藝運動の作家と職人の仕事　　復刊第1号

『たくみ』復刊について

このたび日本の手仕事、各地の匠たちのすぐれた技を広く紹介し、皆様により親しんでいただきたいと考え、小冊子『たくみ』を刊行いたします。

「たくみ」という言葉は、古くから職人＝匠たちの最高の手の技を意味します。近ごろは工業や食品生産の現場でも「匠の技」という表現がなされますが、それはまさしく商業主義による画一的なモノづくりに対する反語としてでありましょう。

こんにち材料や工法だけでなく、作られたものの産地や国も不明なものが溢れ、健康や環境にも不安がつのります。このような時だからこそ、私たちは先祖から受けついだ豊かな日本の文化や確かで美しい品々をもういちど見直すことによって、より希望に満ちた未来を築きたいと願っております。

無名の職人の手になる民藝品にこそ健康で真実の美しさが宿ると説いた、柳宗悦による民藝運動は、七十余年にわたる啓蒙、普及の活動のなかで地方の多くの作り手を育て、銀座の工藝店たくみもまた昭和八年に設立され、その一端を担ってこんにちに到ります。

戦後の復興がようやく軌道にのりはじめた昭和二十七年十月、地方の手仕事の紹介や海外の工藝の最新情報など、当時としてはもっとも新鮮な記事を蒐めて「月刊たくみ」が発行されました。

「たくみ」誌はその後東京民藝協会を経て誌名も「民藝」とかわり、三十二年六月からは駒場の日本民藝協会の機関誌となり広く読者を得ました。

さらに私たちは、情報があり余るこんにちだからこそかえって、真実な、そして実際に役に立ち、誰にでもわかる情報を蒐め、皆様にお伝えしなければと考えてきました。『たくみ』復刊の由縁であります。

（志賀直邦）

特別企画

民藝運動の作家と職人の仕事展

―ふだんの暮らしと蒐集の品から―

会期 十二月四日（水）～十二日（木）
十二月八日（日）は営業します。
会場 たくみ二階ギャラリー
品目 陶磁器。漆器。吹ガラス。ホームスパン部屋着。風呂敷。小物家具。浜田、河井、富本、リーチ、芹沢作品約一五〇点。

かつて浜田庄司は「暮らしぶりがちゃんとしなければほんとうの民藝はわからない」と語られました。ちゃんとした、ということを言いかえて「筋のとおった暮らし」ともいわれました。

若くして陶藝の道を志した浜田は、河井寛次郎と親交を結び、柳宗悦を識って、美しさということの本質について深く考える多くの時をもちました。

浜田は、一九二〇年、日本で焼物の技術を学んだバーナード・リーチと共に渡英、セント・アイヴスに登窯を築き作陶活動をはじめました。

およそ三年半にわたるイギリスでの生活のなかで、浜田がもっとも感心したのはロンドン郊外のディッチリングにあった工藝村の仕事と暮らしでした。

浜田庄司が「イギリスの手織りの母」と呼んだエセル・メイレもその一人でした。メイレ夫人の織物は羊の飼育から糸紡ぎ、染色、手織りまで一貫していると共に、あくまでイギリスの農民の素朴な生活に合ったものでした。

浜田がリーチと共にここを訪れたのは一九二一年のことでしたが、このとき浜田が感心したのはメイレの手織物だけではありません。夕食をご馳走になったとき出された一揃いのスリップウェアの食器とそれに盛られた料理、そして大きなオークのテーブルとの調和でした。

浜田はのちにこう記しています。「すでに英国を離れる前から、私は益子へ行って住もうと決めていました。メイレ夫人やエリック・ギルの暮らしぶりを見て、日本に帰ったら田舎に住むということへの確信が固まったのです。」彼が終生人びとに語りつづけた言葉の原点が、ここにあったのです。

このたび、たくみで展示させていただく蒐集品も、ものづくりではないさる愛好家が、ご家族との日常の生活のなかで、筋のとおった暮らしを志してこられたひとつの証しであります。

浜田庄司、佐久間藤太郎、島岡達三氏らとの交遊も永く、しかし決してその蒐集を誇らずに、普段に用い、簡素に暮らしてこられました。それらの品々から民藝の愛好者として歩んでこられた方の思いをお感じとり下さい。

グラフ 民芸運動の作家と職人の仕事展より

ホームスパン部屋着（及川全三）

山水土瓶（佐久間・皆川共作）

ローソク立て（バーナード・リーチ）

掛軸飾壷図（富本憲吉）

ガラス小壷（舩木倭帆）　風呂敷（片野元彦）

水指（武内晴二郎）

及川全三とホームスパン

ホームスパンとは、手で紡いだ羊毛を染色し、手機で織り上げる毛織物をいいます。浜田庄司が若いころ訪れたイギリスのメイレ夫人の織物もホームスパンですが、当時のイギリスは機械による織物が全盛でした。

そういった時代に、手仕事の復活によってより人間らしい生活様式を取り戻そうとする運動が、ウィリアム・モリスを中心に興りました。メイレ夫人たちの工藝工房の仕事もその流れのなかで生まれたのです。

日本の民藝運動のなかで、糸紡ぎから染色、手織りまで一貫した制作への努力が、何人もの人の手で試みられたのも当然の成り行きでした。

今日いくつもの工房で織られている岩手のホームスパンも、一九三〇年代に及川全三によって始められた仕事にその源があるといってよいでしょう。

及川は岩手の高等師範を出てから慶応の幼稚舎の教員をされていました。折しも郷里の岩手地方が大飢餓でたいへん難儀をしているということで、村へ帰り村長を勤めるかたわらホームスパンをはじめられたのでした。

もともと柳宗悦に私淑していた及川は、柳、浜田の意見も聞きながら、美しさ、丈夫さ、着易さなど工夫を重ね、かたわら多くの弟子を育てました。

及川の仕事は、晩年まで東京の三越で個展として紹介され、日本のホームスパンとして最高の評価を得ました。今回出品される作品は、いずれも及川自身の手になり、風合いにおいても卓越したものがあります。

佐久間・皆川共作による

益子の山水絵土瓶

皆川マスさんといえば、益子の土瓶の絵付師として知られた人で、一日に四、五百個、生涯で数百万個を描いたという。

昭和天皇の御前で、「毎日沢山描いて楽しいか」と問われて、「ちっとも楽しくなんかないよ」と答えてまわりを驚かせた。

昔から焼物の仕事は多くは協業の仕事であった。ロクロ師、絵付師はもちろん窯たき、窯づくりもあった。ひとつの品を作るのにも、把手つけ、釉薬がけなど別人の手になることも多い。おマスばあさんの時代はそういった時代であった。

写真（前頁右上）の一品は、佐久間藤太郎のロクロに皆川マスが絵付したもの、窯も佐久間窯である。由緒のわかる益子の山水絵土瓶の逸品である。

芹沢銈介の仕事と型染のカレンダー

太平洋戦争が終って間もなくの昭和二十年の晩秋のころ、芹沢銈介図案・制作による手漉き和紙十二枚に染められた、一九四六年度版カレンダーが発表されました。

このカレンダーは、当時たくみの役員であった山本正三の発案でしたが、アメリカによる占領下、米軍高級将校の奥さんたちからの強い要望があって、米本国向けのクリスマス・ギフトとして考案されたものでした。

和紙に型紙を用いて、顔料などで模様を染める技法は芹沢銈介の創案で、戦前の代表作としては、ボストン美術館に収蔵された「絵本どんきほうて」や、「法然上人絵伝」があります。

芹沢はのちに「型絵染」による業績によって人間国宝に指定され、また文化功労者にも選ばれ、パリのグランパレ美術館で大きな展覧会が開かれるなど、その評価は海外にも及びました。

型染のカレンダーも内外で大きな反響を呼び、今日まで実に五十六年にわたって広く愛好されております。

芹沢の作風は日本中世の絵巻や丹緑本、あるいはヨーロッパのゴシック時代の書物を彷彿させ、親しみのなかに格調高いものがあります。

それとともに工藝家としての芹沢の才能は、じつに多岐にわたる用途の作品を生み出しました。きもの、帯、屏風、のれん、卓布、風呂敷、装禎本、物語絵、ガラス絵、蔵書票そのほか枚挙にいとまがありません。

それらのなかから、なるたけ親しみ易い作品を選んで、たくみでは常時陳列し販売をいたしております。また型染カレンダーのほかに縮刷版としての卓上カレンダーも取り扱っております。お早目にお買い求め下さい。

芹沢銈介の型染カレンダー

主な品名と価格

型染小品	六千円より
物語絵（極楽から）	六万円より
法然上人絵伝	十万円より
型染カレンダー	一五五〇〇円
卓上カレンダー	一〇五〇円

たくみ歳時記

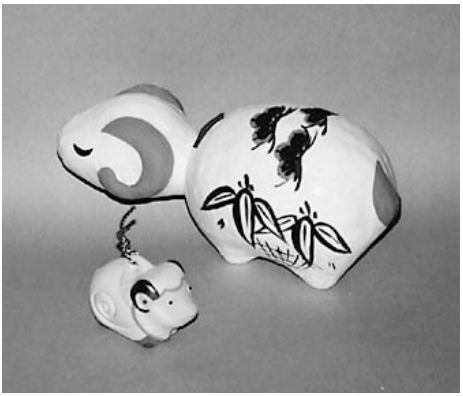
正月飾りと干支の玩具

古来神の依代にめぐらせた注連縄。家庭での正月飾りとしては、水引を用いたものも作られています。水引は和紙の生産が拡まった江戸時代から盛んになり、特に東日本では長野の飯田が産地です。

長野県飯田の正月飾り「寿鶴」

明治二十三年に松江中学の英語教師として来日したラフカディオ・ハーンは、古い城下町松江で、固有の郷土玩具が暮らしの中で庶民に愛されつづけていることに深い関心を持ち、そこに日本の美を発見し「知られぬ日本の面影」という著書をあらわしました。

写真の出雲張子もその頃からのものでしょうか。土鈴は江戸のはじめ、伏見人形の土鈴にはじまるといいます。



山口の羊土鈴（手前）と出雲張子のひつじ

あとがき

先日発表された本年度の文化功労者の一人に、日本民藝館の柳宗理館長の名があったことを嬉しく思う。

柳氏は工業デザイナーの草分けとして有名だが、民藝や工藝が現代の生活の中で、常に実用品として活きつづけることを一貫して主張してきた。

今日人々は、予測を超える世界史的激変の中で、現実を正しく把える方法論を見失ってしまっている。そう考えるとき私は今こそ単なる理念ではない、実感と実体験に基づく行動が必要と思う。そのためにも匠の技、手の仕事、地方の固有の文化を大事にすることが私たちの努めだと信じている。（S）

発行　株式会社たくみ
東京都中央区銀座八－四－二
発行責任者　志賀直邦
電話　〇三－三五七一－二〇一七
FAX　〇三－三五七一－二一六九
振替　〇〇一一〇－二－三五六五九
定価　六〇円（税込）